慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サン・シモンの歴史観に関する二つの論文：研究資料として
Sub Title	Walter M. Simon; History for utopia : Saint-Simon and the idea of progress, Samuel Bernstein; Saint-Simons philosophy of history On the two articles regarding Saint-Simons philosophy of history
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.3 (1961. 3) ,p.230(72)- 234(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19610301-0072
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610301-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

義としてとらえると、どちらかといえばプロレタリアに近いホジスキンが自由を撰び、ブルジョア的色彩の濃いトムスンが平等―社会主義のみちを撰んだという奇妙な結果となってしまう。

ホジスキンとトムスンに関する詳しい分析の結論に、スタークは「自由と平等は、いぜんとして人類の白昼夢であった。それは、多少変更されたとはいえ、ホジスキンの発展説とトムスンの集産主義的ユートウピアとの総合を思想体系とした、カール・マルクスにおいて再現した」

という言葉を添えた。ロックからの長いみちゆきは、このあとゴッセンとジェニングズに引き継がれるのであるが、この検討は他日に譲ることにして、ここでは、ホジスキンの発展説と唯物史観とは質的に異なり、トムスンの集産主義もプロレタリア社会主義ではないこと、――つまり両者の単なる延長の上にはマルクス主義は出現しない、ということを云い添えておこう。古典学派解体期を論ずるためには、広大な未開拓の分野が拡がっている。

（東洋経済新報社刊・A5・四〇〇頁・六五〇円）

（白井　厚）

『サン・シモンの歴史観に関する二つの論文――研究資料として――』

Walter M. Simon; History for Utopia: Saint-Simon and the Idea of Progress, Journal of the History of Ideas, Vol., XVII, No., 3, 1956, pp. 311―331.

Samuel Bernstein; Saint-Simons Philosophy of History, Essays in Political and Intellectual History, 1955.

一

われわれがサン・シモンを研究対象とするのは、もちろん、空想的社会主義がいわゆる科学的社会主義に何を遺産として残したか、という観点においてである。そしてこの場合、彼の歴史観が一つの重要な討議対象となる。十八世紀啓蒙の思想家達が、社会の改革を要求する場合、進歩の名によってではなく、非歴史的な「自然」の名によって、抽象的な「理性」の名によってしたのに比べれば、サン・シモンの歴史観は、少なくとも、一つの発展的な歴史観をもっている、という点だけからしてさえも、遙かにマルクス・エンゲルスの唯物史観に近づいているのはいうまでもない。エンゲルスが「反デューリング論」や「自然弁証法」において、彼をヘーゲルに比しているのは、この点からみても理由がある。だが、サン・シモンが、十八世紀自然法思想家の合理論に対して、経験論的な歴史観をもっていた、というだけでは、サン・シモンとマルクスの間の距離も、接近点も、何も明らかにはされていない。そこで彼の歴史観の基本的性格を知るため、参考資料として右にあげた二つの論文をとりあげつつ、若干の考察を試みたい。

この二つの論文を並べると、W・M・シモンの研究が、サミュエル・ベルンシュタインのそれに比べて遙かに本格的であり、すぐれてもいるのだが、優劣を判定するのがここでの目的ではないので、サン・シモンの歴史観を取り上げる場合の、二人の態度、とりあげ方を検討してみよう。ベルンシュタインの立場は次の点に要約されている。「夢のような思弁の国でのサン・シモンの遊瀝などではなくて、彼の歴史哲学こそが、後の社会主義思想家の霊感の源となったのである。」（p. 100）そしてこの場合、ベルンシュタインが強調するサン・シモンの歴史哲学とは、第一に、歴史の発展における経済的要因と階級関係の重視であり、第二には、歴史発展における非直線的性格――組織の時代と危機の時代の交互交代――の発見とである。このような歴史観こそ、後の社会主義へのサン・シモンの最大の遺産であったという主張は、すでに明らかなように、サン・シモンの歴史哲学の中に唯物史観を見、空想から科学への発展を結ぶ紐を、そこに見出そうとするものである。だが、普通には、マルクス・エンゲルスがその唯物史観を形成したのは、主としてドイツ古典哲学の路線上においてであるとされている。もちろん、マルクスが、哲学的唯物論を、社会観、歴史観としての唯物史観へと展開させた場合に、サン・シモン・フーリエのフランス社会主義からうけた影響は再検討される余地が十分あるとしても、歴史哲学としての弁証法や唯物論は、やはり、ドイツ古典哲学から得たものと考えるべきであろう。

こうしてみると、サン・シモンの歴史観は、はたしてベルンシュタインがいうように、後の社会主義との最大の連結点であるのかどうか、それは彼が主張するほど専ら唯物史観的であるのかどうかが、再び検討されねばならなくなる。（この場合、ベルンシュタインの〝社会主義〟とはマルクシズムを意味すると考えて差支えない。なぜならすべての社会主義が唯物史観を奉ずる訳ではないから。）

答えはこうである。彼の歴史観は極めて多くの成果を遺している。だが、一般に知られているように、サン・シモンの歴史哲学は二元論的であり、唯物史観的な面と等しく観念論的な面を多分にもっているのであり、むしろ、歴史観におけるこの二元論こそが、彼を空想的社会主義者たらしめているとさえいうことができよう。彼の歴史観は無論大きな成果をもっているとはいえ、歴史哲学それ自体としては空想と科学を結ぶものではなくして逆に分つものである。それを結ぶものは、もっと別な所にある。

このサン・シモンの歴史哲学の二元的性格を十分に、かつ思想史的考慮をもちつつ指摘したのが、ウォルター・M・シモンの論文で

ある。

二

サン・シモンの歴史哲学の二元的性格はムックル（Muckle; Henri de Saint-Simon: Die Persönlichkeit und ihr werk, 1908, SS 170—171.）やトレルチ（Troeltsch; Der Historismus und seine Probleme, 1922, SS. 385—388.）などによっても早くから指摘され、わが国でも十分認識されている。したがって、ここでW・M・シモンとともにサン・シモンが如何に二元論的であるかを忠実に再現するよりは、彼の歴史哲学が二元論的であることの思想史的意味を、少しく積極的に探ってみたい。

サン・シモンが思想的活動を始めた十九世紀前半は、一つの時代的転換の時期であった。十八世紀から十九世紀への、合理主義から経験論への、自然法から功利主義への、理性信仰からロマンティンズムへの転換期であった。十八世紀啓蒙思想のすべての成果と希望を托したフランス大革命が、世界各国の思想に大きな衝撃を与えた時代であった。サン・シモンは正にこの時代の子である。啓蒙思想の成果としてのフランス大革命への幻滅は、時代に、啓蒙思想を超える新しい思想の形成を要求した。理性や、自然に代る、新しい秩序の基準が現われねばならない。このような時代の子として生まれたサン・シモンの思想は、同時代の先輩カントと等しく、二元論的だったといえよう。哲学と社会と、その研究対象は異なるとはいえ、カントとサン・シモンには興味ある類似があるように思われる。大陸合理論とイギリス経験論の総合者であると一般にいわれるカント。他方、自然科学の方法である実証的方法を人間の歴史と社会に適用し、実証主義の祖とされながらも、一方では十八世紀啓蒙の思弁的合理論から足を洗うことができなかったサン・シモン。彼らは二人ともア・プリオリな思弁と、ア・ポステリオリな実証とを共に自分たちの方法として採用したのである。さらに、「すべての人にその才能の最も自由なる展開を可能ならしめること」に要約されるサン・シモンの全思想はフォルレンダーによれば「これは又同様に、サン・シモンの知らなかったカントにおいても同様の形で見られる」（Karl Vorländer, Geschichte der Sozialistischen Ideen, 1924. 邦訳、一四五頁）のである。事実の観察に基く実証的方法によって、サン・シモンが、現実の歴史や社会に分析のメスを当てる時、その切り口は驚くほど近代的であり、鋭い。たとえば、彼が『産業者の政治的教理問答』（Catéchisme politique des industriels, 1823—24）のはじめの部分で、大革命に至る迄のフランス社会史を分析する時、多少の用語や、些細な点を改めれば、それは今日でもそのまま、要領を得たフランス絶対主義発展史論として立派に通用すると思われるほどなのである。その点で、サミュエル・ベルンシュタインが、歴史における経済的要因の重視と、弁証法に類似した発展図式において、彼の歴史観を科学的社会主義の先駆であるとみなしたのは、そう的を外してはいないのである。

W・M・シモンも指摘するように（p. 312）サン・シモンの読書の性格と範囲は、手当り次第に読んだらしい小説を別にすれば、不幸にして殆ど直接的な材料はなく、彼の著作から窺うのみであるけれども、歴史の発展における経済的な力の認識は、革命家バルナーヴやサン・エチアンヌ（S. Bernstein; ibid., p. 102）あるいはランゲ（Linguet）（Ibid., p. 108）がすでにはっきりと述べている所であり、フランス大革命以後ますます深まりつつある認識だったといえよう。そして、理想の社会を自然の名によってではなく、進歩の名によって、未来にむかって実現しようという考え方は、コンドルセーから、そして三段階の発展法則はテュルゴーから学んだものであることは一般に知られている。この点、思想史的研究は更に要求されているが、ともかく、実証的な事実観察の方法を、歴史と社会に適用しようとする彼の経験論的側面は、はっきりと十八世紀自然法思想を超えようとするものであり、正に十九世紀のものである、ということができよう。

だが、他面、サン・シモンは、十八世紀理性主義から完全に解放された訳ではなかった。それは彼が、過去の歴史観察から離れて、未来社会の構想に至るやすぐに現われる。過去の事実を分析する時に示したあの鋭さに代って思弁的な合理論が甦えり、観念史観が復活する。この場合、彼の科学的な歴史分析と、思弁的な未来の構想の間には埋めがたい大きな溝があるように思われる。そしてこの溝こそ、彼を空想社会主義者にとどまらしめた最大の要因であるということができよう。彼は社会主義社会の構想をすでにもちながら、それを実現する担い手を見出すことができない。彼によれば、理想社会はエリートによって支配されるのであり、正しい知識が社会にゆき亘れば、たち所に、かつ円滑に実現されるのであり、この正しい知識が一人の天才によって——つまり彼自身によって——発見されさえすればいいのである。大衆の自覚的な力は全く必要とされていない。つまり、実証的方法による歴史分析においては、歴史発展の必然性、不可避性を証明することに力を注いでいたサン・シモンは、問題が未来社会の実現に関するや、たちまち個人の天才や指導、社会一般にゆきわたるべき普遍的理念について語り出すのである。

大切なことは、彼のこの経済史観的な側面と、観念史観的な側面とは、無自覚的に混在しているのではなくて、カントの場合と同様、方法論的に自覚的、積極的に肯定されていることである。「教理問答」における次の章句を見よ。

「われわれはこの『産業者の教理問答』に、学術制度および教育制度に関する一巻をくわえるつもりである。われわれが基礎をうち立て、実行はわれわれの弟子オーギュスト・コントにゆだねた著作は、産業制度を先験的（アプリオリ）に解明することになっている。他方この教理問答では、その後来的（アポステリオリ）説明をわれわれは続けるはずである。」その後コントは師によって指定されたその責を果した。それが教理問答の第三冊になったといわれる。これに対し、サン・シモンは次のよ

うにのべている。「それはわれわれの体系の総則を説明していない、すなわちそれは、その一部しか説明していないのである。そしてそれは、われわれが第二義的としか考えていない総則に主たる役割を演じさせている。」われわれの考えは「われわれの弟子の考えとは、いちじるしく違っている。彼はアリストートルの見地に、すなわち今日物理・数学アカデミイが用いる見地に立ったのだ。したがって彼は、アリストートル的能力（科学的経験的能力……引用者）をなかんずく第一のものと、すなわち唯心論にも産業的能力や哲学的能力にもまさるはずのものと考えた。われわれが今述べたことから結果することはこうである。すなわち、われわれの弟子はわれわれの体系の科学的部分しか論じないで、その感情的および宗教的部分は少しも説明しなかったのである。」（Catéchisme, 邦訳、世界大思想全集二二―三頁）蛇足をつけ加える必要はないが、要するに、科学的、ア・ポステリオリ的方法と共に、唯心論的、宗教的、哲学的、感情的、ア・プリオリ的方法が、同時に自分の方法論としてサン・シモンによって意識されていたことは銘記されるべきであろう。二元論は彼自身、方法論として積極的に意識していたのである。このようにしてサン・シモンはその科学的歴史観によって十九世紀と未来につながり、その哲学的、思弁的歴史観によって十八世紀と過去につながる。サン・シモンは十八世紀と十九世紀の、そして自然法思想と科学的社会主義との転換期に立っているといえるのではなかろうか。

三

W・M・シモンはサン・シモンの歴史哲学における二元論を指摘する。だが彼の場合、その二元性の意味は単一でない。合理主義と経験論の混合という意味で二元的であり、決定論と自由意志論の混在の意味で二元論であり、実証主義――彼はサン・シモン自身をも実証主義者とみなす――における目的と手段の分離の意味において二元的であり、必然性と有利性の対立の意味で二元的であり、経済的決定論と観念史観の矛盾の意味でも二元的である。W・M・シモンは、大体、サン・シモン自身、体系的な歴史哲学をもった思想家ではないから彼の思想の中に何か一貫した歴史観を求めること自体、最初からないものを求めていることだと考える。むしろサン・シモンは彼のユートピアに奉仕させるために歴史や進歩の観念を勝手に使ったのだ、（p. 331）とのべている。これはある意味で当っている部分もあるが、又他面いいすぎでもあるようだ。彼の歴史分析の鋭さを思えば、それが全く、自分のユートピア思想に都合のいいように作り上げたものだとは決していえないのである。サン・シモンの一見、体系を欠いた、矛盾だらけの歴史観の中に、実は唯物論と観念論の、科学と宗教との、方法論的二元論が貫いているように思われる。彼の歴史観の中に、十八世紀と十九世紀の共存、自然法思想と科学的社会観の併在、つまり、時代と時代の結び目を見出すことができるのではないだろうか。

（野地　洋行）

『国有化問題をめぐる最近の文献』

W. A. Robson: Nationalized Industry and Public Ownership, 1960, John Hughes: Nationalised Industry in the Mixed Economy, 1960 etc.

「国有化政策は時代遅れになった」ということが最近よく言われる。事実、「民主社会主義」政党のプログラムにおける国有化政策の地位は非常に低くなっている。しかし、混合経済的性格の強い現代資本主義社会においては、社会主義者ならずとも、国有化産業乃至公企業の重要性に注目せざるを得なくなっている。そのためか、最近、国有化問題をめぐる議論はむしろ活潑となり、いくつかの注目すべき文献が出版されている。この小稿は、ここ二、三年中に出版されたその種の文献のうちから若干の興味あるものを選び出して紹介、論評せんとするものである。国有化問題をめぐる議論は英国労働党政府が第二次大戦後に行なった国有化政策に対する批判を中心になされてきているので、本稿でも、この問題についての文献を紹介することにする。

一、ケルフ・コーエン「英国における国有化」、EBI「国有化」

先ず国有化政策に対して最も批判的な論を紹介しよう。その一つはケルフ・コーエン著の「英国における国有化――ドグマの終焉――」（Kelf-Cohen: Nationalisation in Britain――the end of dogma――, 1958）である。その副題からも察せられるように、この書は、英国における国有化政策を徹底的に批判して、国有化に対する社会主義者の期待が、ドグマに他ならないことを明らかにしようと試みている。以下しばらく、彼の論を忠実に紹介することにしよう。

この書は全部で十六章からなっているが、先ず第一章では国有化についての理論の発達を概観している。ここでは初期の社会主義者が国有化に対して極めて素朴な期待を寄せていたことが指摘される。例えば、S・ウェッブも初期の頃には、国有化を行なえば資本主義的経営の考えがなくなると考えていたので、国家独占が消費者を搾取するということなど考えていなかった、と言う。第二章では、一九二〇年から第二次大戦後の労働党政権成立にいたるまでに行なわれた公有化政策とそれに伴う問題を指摘する。特にH・モリソンの国有化論が批判の対象とされている。彼はこのように英国における国有化政策の理論と実際の歴史を簡単に考察した後、第三章以下において、第二次大戦後の英国において行なわれた国有化政策を次のように批判している。

先ず第三章では国有化石炭業が批判されている。国有化前には国有化をすることによって国有化される産業で働く人々の心（heart）が変ると期待されていた。ところが、国有化後も労使関係は改善さ